



大学とミステリー

権田 萬治 文学部教授

▲次作品が楽しみな栗井脩介さん(左)と権田教授
＝3月の大藪春彦賞の授賞式で

この1、2年、日本の一部の大学では、大衆文化研究の一環として、推理小説の資料収集や研究を強化する動きが目立っている。

立教大学では、隣接する江戸川乱歩邸を江戸時代や推理小説に関する貴重な資料と共に購入、これを機に文学部をミステリー研究の拠点とする構想で、昨夏には東武百貨店で乱歩展を開催して多くの人を集めた。成蹊大学図書館では、研究家の戸川安宣氏の所有する海外ミステリーの小説や雑誌の原書や訳書のコレクション約5万点の寄贈を受け、将来、大学内外の研究者にも開放する計画を進めている。専修大学文学部では、以前から、純文学だけでなく、広くミステリーや時代小説、マンガなどを研究分野として受け入れてきたが、卒業生に栗井脩介氏(平3文)のような大型ミステリー作家が誕生するなどうれしい話題もある。

こういう動きは、以前からアメリカなどでは見られたもので、例えばハメット、チャンドラーなど有名なハードボイルド作家の資料は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の大学図書館が特別コレクションとして所蔵しているし、『宝島』や『ジェキル博士とハイド氏』などで知られるスティブンスンの資料はエール大学図書館が一番豊富といわれる。また、オックスフォード大学をはじめ英米のお堅い大学の出版局がこういう分野の研究書の出版をしているのも知られている。

戦後、日本では慶応推理小説同好会(1952年)をはじめ、ワセダ・ミステリー・クラブ(57年)など、各大学に学生のクラブが作られ、そこから多くの作家や評論家が巣立って行った。特に、この数十年は、関西の大学の同志社推理小説研究会(69年)、京都大学推理小説研究会(74年)の活動が活発で、有栖川有栖(同志社大)、綾辻行人、法月綸太郎(以上京大)など、いわゆる〈新本格派〉の作家が誕生している。

この点、こういうサークルがなかった専修大学にはハンデもあったわけだが、99年に栗井脩介氏が『栄光一途』で新潮ミステリー倶楽部賞を受賞、次々と話題作を刊行して、今度はさらに『犯人に告ぐ』で大藪春彦賞を受賞した(本紙3月号既報)。

『栄光一途』は柔道界のドーピング問題を扱い、続く『虚貌』(02年)では、21年前の放火殺人事件の加害者が次々と殺される事件を老刑事が追って行くストーリーで話題を呼んだ。さらに、『火の粉』(03年)では、無罪判決を言い渡した後、その裁判長の家の近くに引っ越して来た被告によって、一家が恐ろしい悲劇に見舞われるプロセスをサスペンス豊かに描き、テレビ化もされて好評だった。

今回の受賞作『犯人に告ぐ』(04年)は、連続児童殺人事件の犯人にテレビを利用した「劇場型捜査」で警察が対決するという警察小説で、警察やテレビ界の動きもよく描けていて読み応えがあり、すでに東宝での映画化も決まっている。

作者は岡嶋二人や宮部みゆき、ジェフリー・アーチャーなどの作家が好きだという。いずれも小説作りが巧みな作家であり、論理的な謎解きよりもサスペンスを重視する点では、氏と

共通するところがある。氏の優れた点は、登場人物の個性的肖像を巧みに描き出していることと、取材が丹念で題材が現代人の感性に合った社会性があることで、これからさらに飛躍する可能性を秘めていると思う。

実は、雫井氏以前に本学出身で推理作家としてデビューした人は、私が選考委員をしていた時代に、横溝正史賞の佳作になった西浦一輝氏(昭61法)が最初である。『夏色の軌跡』(96年)など3作を書いているが、その後ヒット作がないのが残念である。

雫井氏以後では、『果てしなき渴き』(05年1月刊行)で第3回「このミステリーがすごい」大賞を受賞した深町秋生氏(平10経済)がいる。受賞作は退職刑事が失踪した娘の行方を追うというストーリー。すさまじい血と暴力の世界が炸裂する中で娘の知られざる肖像が明らかにされる。

3年前から書き始め、1年半ほどで書き上げ、その後推敲して仕上げたという。レイプや近親相姦などもある暴力的な作品だけに選考委員の一人も指摘しているように、拒絶反応を示す女性読者がいる心配はあるが、パワフルな文章力が評価され、受賞となった。いずれにしても、専修大学から今後どんな推理作家が生まれるか、楽しみである。

ごんだ・まんじ=日本新聞協会編集部長、マスコミ倫理懇談会代表幹事などを経て本学文学部教授。専門分野はジャーナリズム論、大衆文化論、近現代文学。光文シエラザード文化財団ミステリー文学資料館館長

ビジネスのプロに「実務経験」学ぶチャンス

寄付講座 新たに2講座

企業・団体のご寄付により、実施されている各種の講義(経営学部では『企業による提供講座』)。ビジネスの第一線で活躍する講師による迫力ある講義は毎年好評で、多くの履修者を集めている。今年度は新規に2講座が始まった。

日本税理士会連合会寄付講座

日本税理士会連合会からの寄付講座として、専修大会計人会(高橋貞雄会長)が創立40周年記念事業の一環として商学部で行う「税務会計講座」が4月からスタートした。

同講座は05年度から07年度までの3年間、毎週木曜日に開講されるが、本年度は前期に14コマ講義があり、履修者には2単位が認定される。



▲前列右から坂田日税連専務、森日税連会長、高橋会計人会会長、松原教授。後列は客員講師と奥村輝夫教授(右)



▲講演する森会長

第1回の講座は、4月14日に日本税理士会連合会の森金次郎会長が「現代社会における税理士の使命」と題して講演。税制の歩みと税理士制度の沿革、税理士の業務、現税制の内容など懇切に解説。約200人の学生が熱心に聴講した。

同講座はこのあと7月14日(木)まで、本学のOB会計人11人が実務家の立場から講義する。コーディネーターの松原成美教授は「この講座を通じて税理士を目指す学生が増えていくことを期待する」と話している。

川崎信用金庫・信金中央金庫

寄付講座

川崎信用金庫・信金中央金庫の寄付講座「変貌する中小企業金融」が4月から始まった。地域信金と信金中金が協力して大学に寄付講座を設置するのは全国で初めて。本学においては3年間継続して行われる。経済学部経済学科と商学部の3、4年次生および経済学部国際経済学科の2年次生が対象で、今年度の履修者は約200人。



▲講演する青木弘和氏



▲あいさつする八木理事長

4月20日の第1回講義では、信金中央金庫総合研究所副所長の青木弘和氏が、中小企業の現状と特徴・動向や、中小企業政策、中小企業金融の現状と問題点を語った。

講義に先立ち、八木晋郎川崎信金理事長が「中小企業の活性化が地域の活性化につながる。実務経験を通じた分かりやすい講義を通して、中小企業金融の実態を理解し、また信金の業務内容についても理解を深めていただきたい」とあいさつした。

日本ユニシス(株) 提供講座

3年目スタート

4月25日には、経営学部で3年目となる日本ユニシス(株)の、「情報管理特殊講義」がスタート。同社の島田精一社長が「ITサービスをリードする顧客価値創造企業」と題して講演を行った。



専修人の新しい本

文政・天保期の史料と研究

青木美智男 編

徳川幕藩体制が崩壊し始めた1800年代、民衆はどのように行動したか。本書は青木教授をはじめ同ゼミの院生たちが翻刻した江戸後期の古文書、大塩の乱の「浪華騒擾紀事」、日本橋の小商人の生活記録「自分覚之事」と、関連論文として「幕府文政改革前後の東海道神奈川宿と関東取締役」「秋田感恩講による孤児救済」「幕領村落における独り身対策」を収載。これらから幕末の動向を追究している。(ゆまに書房・本体8000円＋税) 編集(あおき・みちお)＝文学部教授。担当は日本文化史ほか。

夢の事典

ジェームズ・R・ルイス 他著 / 塚本利明 他訳

「夢」。どこか幻覚のようでありながら、当人には一貫した現実感をもって迫る異様な世界。本書は、この不可解な体験に人類がどう対処してきたのかを取り上げ、神話・宗教・文学・

人類学等から科学的睡眠研究にいたる諸分野において「夢」がどのように扱われてきたのかを、手際よく解説したものである。

第2部では、睡眠中の心は自己の考えを具体的なイメージとして表現しようとする、という原著者の主張が強調されている。(彩流社・本体6000円＋税)

訳者(つかもと・としあき)＝専修大学名誉教授、久泉伸世(ひさいずみ・のぶよ)＝専修大学北海道短期大学助教授、金里美(きむ・りみ)＝日本大学講師、鈴木英夫(すずき・ひでお)＝専修大学非常勤講師

The Global Economy in the News 英字新聞で読む国際経済の動き

常行敏夫 他編

本書は2002年に出版したものの最新版であり、その特徴を引き継いで経済時事英語に重点を置き、その上で継続的に報道されるであろうトピックスを厳選している。第5章までは日本経済を扱い、第6章からは国際経済に移行するが、中国経済の影響を国際経済理解の重要な鍵と位置づけている。各記事の後の解説を読んでから英文記事を読むことで、英語だけでなく、国際経済の動きについて基本的知識を身につけることが出来、付属のCDを利用して、目と耳で同時に学ぶことが出来るのも特徴だ。(専大出版局・本体2400円＋税)

編者(つねゆき・としお)＝経済学部教授。担当は経済時事英語。

【ニュース専修2005年5月号3面】